
夏好き少女と暑がりの俺

楯板ミズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏好き少女と暑がりの俺

【Nコード】

N8284T

【作者名】

楯板ミズキ

【あらすじ】

あの日、あいつは唐突に言った。

「はるなつあきふゆ春夏秋冬、どれが好き？」

遠くで聴こえるセミの声。 あか 紅く暮れ行く空。 川に掛かった橋の下で。

ラムネに入ったビー玉のような、透き通った瞳が俺をとらえる。空っぽの虫かごを握る手が汗ばむ。蚊に刺された足がかゆい。

答えはきつと、今も俺の中で眠っている。それが分かったとき、俺はもう一つの答えに辿り付いている。そんな気がする

さて、なんて答えたっけな

第1話(1)

夏が来た。

それは、高校に入って始めての夏の訪れだった。

じりじりと蒸した校庭からサッカーをする生徒たちの甲高い声が耳を打つ。しかしそんなエネルギーシユな声など今の俺にとってはアブラゼミのユニゾンとたいした差異はなく、集中を妨げるといふ域を快速急行で通り越し、昼休みの放送並みに空気と同化した存在でしかなかった。

教科書を読み上げる教師の声にも、もはや覇気たるものを感じない。かくいう俺も頬杖片手に暑さでうだつていのだが。もう産業革命だかフランス革命だかなんだか知らんが、とりあえずこのコンディションでは頭に入るはずがない。それより今は教室に冷房装置をつけるか否かについて議論すべきではないか。まあ田舎の公立高校だ、千歩譲ってクーラーとは言わん。だが扇風機くらいはあってくれてもいいじゃないか。周りの小中学にはあるぞ。納得行かん。

サウナ状態の教室でも唯一のオアシスであるはずの窓際に座る俺ですらこのテンションだ。廊下側の連中には俺が視線で暑中見舞いを送っというてやるぜ。

窓際の一番後ろの俺の目の前には、丸まった背中がある。この暑さの中で幸せそうに微笑みながら爆睡しているこいつは中学からの同胞（不本意だが）、恭介。ふむ、相変わらず殴り飛ばしたくなるような顔してやがんな。そのまま永眠させたるか。

だが本日の授業もこれが最後。あともう少しの辛抱だ。俺はふと右隣に目を移す。すると俺の予想通り、そこには背筋をすつと伸ばして、暑さにドメイン指定拒否を設定したかのように涼しげな顔でノートをとる少女がいた。

第1話(2)

鶴崎麻弥つるさきまや。生まれたときから一緒にいるってくらいの、幼馴染。まあ俺たちの関係はそんな甘美な響きのモンではないがね。せいぜい腐れ縁ってとこさ。

クリアファイルをうちわにしつつ教師も半ばやつついで叩き付けるように殴り書きしている。俺はもうだめだ、指に力が入らない。今度隣のこいつから借りよう。そう思うと急に荷が軽くなり、残りの時間を寝て過ごそうと腕を組んで顔を埋めたが、扇ぐのをやめた瞬間に待ってましたとばかりに汗が噴き出したために、断念せざるをえなかった。

これで7月上旬だというから気が滅入る。

寝られずともうつらうつらしているうちに授業は終わっていて、今帰りのホームルームも終わった。

「部活か……」

愚痴をもらしながらも着がえようとネクタイに手をかけたとき、後ろから肩がつつかれた。振り向かずともその行為の主が誰だか分か

るのだが、便宜的へんぎてきに一応振り向いてやる。

「今日部活ないよ。キミ」

案の定、そこにいた麻弥は短めに切りそろえた髪をやはり涼しげにさらりと風に泳がせて。

「……………なぬ？」

「今日から期末テスト一週間前。なので部活はありませぬぞ、なおや君」

途端に、俺の中で何かがスプラッシュした。

「そうだった！ 助かったぜ……………」

んならもう学校に用はないぜと鞆を肩にかけると、そいつは不自然に視線を斜め下辺りに移し、横髪などを指先でいじりながら言いにくそうにぼそつと呟いた。

第1話(3)

「……たっ、たまには一緒に帰ろうかな……って」

「ん？ ああ、いいけど」

まあ何の気もなしに応じたが、確かに考えてみればこいつと帰宅をともにするのもしばらくぶりだな。

久々の二人での帰路であるが、するのは本当に他愛もない話ばかりで何も変わったことはない。手をちよつと伸ばせば触れられる距離で歩いてはいるが、別段そんな衝動に駆られることもない。世間的にはこいつも女子という生物らしいが、今更そんな扱いに変えるのも無理だ。

この地域は都会の喧騒とは無縁の、ぶっちゃけド田舎である。上から見たら超巨大なサツカースタジアムみたいになってんじゃないかと思うほどに田んぼとあぜ道だらけで、周りなんもない。あぜ道を抜けると川が見えてきた。浅くて流れも緩やかであるため、昔はよくここで遊んだものだ。

そのまま河川敷を進んでいると、隣からクイクイと肘が入ってきた。

「期末試験、調子どう?」

……そういう話題は勘弁だぜ。俺の露骨に嫌がる顔を見てこいつはさらに嫌味を加算し、

「赤点追試まみれとかやめてよね。そうなくても手伝わないから」

「ああ、もうほっといってくれ」

俺はぶっきらぼうに答えた。余裕そうなこいつは昔から成績優秀、身体能力抜群と絵に描いたようなハナマル君を演じている。対する俺は今まで赤点スレスレ、身体能力ビミョーときた。ああ、もうほっといってくれ。

そうこうしていると二人の家への分岐点まで辿り着いた。嫌な話題から逃れたい俺は「じゃな」とだけ言ってさっさと自分の家まで駆け足する。すると慌てた様子で麻弥が、

「あ、ちょっと待って」

と引き止めたが、なんかもつ走り出した手前止まるわけにもいかず、手を上げて合図し俺は家に逃げ込んだ。

思えばあのとき、あいつは何を言いかけたんだろうな。

第1話(4)

「おかえり、兄ちゃん」

ソファで肘枕をしてせんべいをかじりつつテレビをみながら4つ下、小6の妹が出迎えてくれた。オバハンか、お前は。我が家は4人家族なのだが、両親ともに帰宅は夜遅い。そのため家事は妹と分担して行っている。今日の晩飯は俺の担当だが……。冷蔵庫を開けて俺は固まる。なんもねえ。余った野菜ならちよこつとあるんだが、ありあわせで作れちまうほど俺の料理スキルは高くない。どうしたもんか……。

「麻弥ねーちゃんに作ってもらおっか！」

「どひよえーい！」

おおつと、今のは忘れてくれ。懐から飛び上がって来られたもんで驚いちまった。さて、その選択肢があつたか。奴はなんとこの年で料理までイツチヨ前にこなしてしまうのだ。ぐぬぬ、しかし。先ほど尻尾巻いて逃げた俺が言うのもなんだが、あいつに頼るのはいいかげん俺のプライドが許さん。いいさ、俺にだって中学時代から積み重ねた経験があるんだぜ。見てろ妹よ。今うまいもん作ってやる

「なにこれえ。こんなん食べれないし」

「だまれ。食べ」

「だって苦いし、辛いし、なのになんか変に甘……うぶ」

く、野菜のコチュジャン炒めが焦げちまったから中和せんとカ〇ピス入れたのが失敗だったか。だが自分で作ったんだ、俺は全部食うぜ。全、部……。

夕食を無事（！？）に済ませ、風呂から上がりリビングに戻ると、妹がパタパタ駆け寄ってきた。

「ポストになんか入ってた！」

俺は妹が差し出した茶色の封筒を受け取った。

第1話(5)

封筒には何も記載がなく、どうやら直接玄関ポストに投函されたようだ。おそろおそろ茶封筒を開け中を覗くと、なにやらカードが一枚入っているようだった。取り出してみると、これは タロットカード、か？ カードの中心部にはコンパス、その上にはスフィンクス、四隅には白い羽の生えた動物が描かれている。他にもなにか入っているかと封筒を逆さにすると、はらりと紙が一枚落ちてきた。拾い上げてみると、小さな字でこう書かれていた。

『運命の輪』

これは……ヤバイ系のやつか？

俺がカードと紙を手に取りしげしげと見ているところを横からぴよこぴよこ飛び跳ねて自分も見ようと試みていた妹だったが、しびれを切らしたか俺の正面に回りこむと同時に「てやつ」と俺からカードと紙をかつさらっていった。

「あ、コラ。まだ何か分からないから、返せ」

しかし妹は舌を出し、

「やだー。ちょっとだけみせてー」

と言いつつ俺から遠ざかる。タロットなんか知るわけがないのに、この小6。まあすぐに飽きるだろう。目を瞬かせながらカードを色んな角度から見ている妹をよそにリビングに戻った俺は、とりあえずソファに深く腰掛け冷静になって考えてみる。

結論。確実にアヤシイ。送り主の情報が全くないというのが怖すぎる。もしやこれは、ヤバい宗教かなにかの勧誘だったり催眠だったりするのだろうか。そう本気で思った瞬間、急に部屋の至るところから見られているように感じて、年甲斐もなく背筋が凍りついて怖ろしくなった。頼む。何かの間違いであってくれ。

俺が頭を抱えてうなっている、妹がテテテ、と寄ってきた。

「飽きた」

予想以上の早さでしたね。たいへんよくできました。受け取ったカードを俺はもう一度見つめてみるが、やはり心当たりはない。

うん、手違いだ。そうに違いない。俺には関係ない。自己暗示をかけるようにして、カードをひとまずテーブルに置き、俺はそのまま自室のベッドに潜り込んだ。

第1話(6)

その日、夢を見た。

見慣れた河川敷の橋の下、そこに幼い少年少女がたたずんでいる。俺は、どこからかその二人を見ているのだ。

少女は泣いていた。少年は何も出来ずただ呆然と立ち尽くしている。それを見た俺は、なにか心に突き刺さるものを感じた。やがて、少女はすりきれた声で何かを呟く。しかし、遠くてよく聞き取れない。少女の言葉を受け取った少年は、力強く肯く。少女は泣き止み、涙を振り払って笑顔で言った。

「約束だよ！ このカードに願ってるから！」

少女は少年に自らの持つカードを見せ付ける。二人の顔すらはつきり見えないのに、なぜかそのカードの絵柄は俺の目にもすっかり見えた。……ん？ このカードって

その瞬間、光に包まれるような感覚がして、俺は現実を引き戻されていた。

第2話(1)

ほらさつさと起きな！ とでも言わんばかりに鳴り散らす目覚まし時計をノールックで黙らすと、俺は急に何かを思い出さなければならぬ使命感に襲われた。く、なんだ……これは 夢を見たことは覚えていて、それがなにか大事な意味を含んでいることも分かる。だが、それが何なのかは分からないし、時間がたつにつれ夢の内容も思い出せなくなってきた。そうならたらどうしようもないので、俺は重いまぶたをこすりながらリビングに入った。

「ん、んあおー」

棒付きアイスを頬張りながら妹が出迎えた。おそらく「おはよー」と言ったのだろう。すでに着替えを済ませており、アイスを食べきったらもう家を出るのだろう。朝からアイスとはまた……俺の分はまだあったかな。ほんと暑いよね、最近。

冷蔵庫を隅から隅まで漁って妹がうまそうにペロペロしてたのが最後だったと知った俺は、元から低いテンションゲージの底をドリルで削る勢いで落とし、朝食もそこそこに家を出た。

うあ、アホみてえな直射日光が俺をいぢめるよう。もうやめて、俺のライフはゼロよ。暑さとダルさに肩を落としながら下を向いてほ

「たいしたことじゃないからいいの。それより、この程度の暑さでへばってたら午後までもたないぞ」

ちょうど耳が隠れるくらいの長さで、前髪は片側だけピンで留めたそいつが、俺の肩をたたく。いてえな、こら。夏は嫌いなんだよ。

「お前は元気そうで羨ましい限りだ」

「だって、夏好きだもん」

麻弥は自慢げに胸を張る。すると、平均ちよい上サイズのそれにワイシャツが持ち上げられてウエストが見えた。だがこいつのヘソチラなんか日常的に見慣れた俺にとってはなにかが起こるわけでもなく、はしたないからそうやって無防備に肌を見せるんじゃないやありません、とむしろ保護者的な視線を向けるのだった。

まあなんだその、俺はともかくとして、お前は気づいてないかもしれないがな、それなりに自分が視線の対象たりうることを自覚しろということだ。

第2話(2)

少し時間がたって現在授業の合間の休憩時間である。

次の授業まで寝るか　と俺が机に身を預けようとした瞬間、俺の顔を包む母なる大地たる机が突如姿を消しており、俺は前方に崩れた。

「おわわわあああー！」

……失敬。倒れた状態で顔を上げると、2段階くらいキモさを増した恭介がニヤニヤと俺を見下ろしていた。恭介とは中学からの付き合いで（不本意だが）……って、前にも言ったっけか。スプレーでツンツンに固めた頭に、四角い黒縁メガネ、そして首から提げたデジカメ。それがコイツの常装備である。で、いきなり何しやがるてめえ。

「麻弥ちゃんの様子が気になってな。お前何か知ってんじゃないのか？」

あん？　なんも知らんよ。俺は起き上がって、確認のために奴の横顔を見てみた。するとなるほど確かに、麻弥の横顔からは物憂げな印象が見てとれた。いや、それにしてもお前の洞察眼にだけは敬服するね。この微妙な表情の変化に気付けるのは長年顔をつき合せて

来た俺だけだと思っていたが。

恭介が「麻弥ちゃんから本心を聞きだせるのはお前しかいない」とか言うし、このままでは安眠は得られそうにないので、とりあえず俺は麻弥とコンタクトを取ることにした。

「おい、なんかあったのかよ」

すると麻弥はあからさまに「！」という表情を作ったあと、また伏し目がちになって言った。

「ううん、なんでもない」

いや、その表情はなんでもないようには見えんがね。朝からそんなにテンション低かったか？

「なんか要求があるなら聞くぞ？」

麻弥の耳がここぞとばかりにピクン！ と動いた。しまった、この展開は奢らされるパターンか？ 俺は顔に縦線を張り巡らせて身構えていたが、こいつから発せられたのは意外な言葉だった。

「じゃあ今日の放課後、図書館に付き合っ」

……え、そんなんでいいのか？ それなら安い用だ。

「ああ、分かった」

「ほんとに？ よかった！」

こいつはふんわりと微笑んでみせた。その瞬間、俺の中で小さな
にかがポツ、と明かりをつけたように感じた。

すると途端にクラス中から惜しめない拍手が沸き立った。な、なん
だこれは！？ カシヤ。フラッシュが俺をとらえた。……恭介。貴
様……。奴はまんまと俺を乗せておいて、俺が目を離れたスキにク
ラス中の注意を引き付けてやがったのだ。

てめえ、後で覚えとけよ。

「なあ、お前もなんとか言っ……」

って顔赤くして黙ってんじゃねえ！

第2話(3)

テスト前だろうが猛暑だろうがネムネムさんは通勤してきたようで、やはり俺は今日も半分寝ながらの授業消化となった。途中、何度か前と右隣からちよっかいを受けたが。

そして放課後、掃除を終えて教室に戻ってきた俺を麻弥はちよこんと机上に座って律儀に待っていた。

「待たせた。じゃ、行くか」

麻弥はソフトクリームがとろけるように微笑んで、うん！ と頷いた。

学校から図書館に行くとなると、俺や麻弥の家とは逆方向に位置する駅前まで向かうことになる。この一帯は無駄に広い土地がありながら川と田畑以外何も無く、最寄り駅といってもここから歩いて30分はかかる。

この炎天下の中歩き倒すだ……普段ロクに運動しない俺では、文字通りぶっ倒れちまうぜ。こんなときに自転車があれば……

下駄箱で靴を履き替え、嘆息ひとつ外に踏み出し、まぶたに差し込むような光を浴びて俺が一瞬ふらつきかけたときである。後方から地面を擦る音がして、自転車が猛スピードで俺と麻弥を追い抜き、

急ブレーキで二人の前を塞ぐようにして止まった。

「ぜえ、はあ、間に合った……よおご両人。駅前、行く、なら、このチャリン、コを使うと、いい、ぜ」

アゴから汗水たらし、身体にビツチリとワイシャツをへばりつかせた恭介が、息急き切って何とかいい終え、眼鏡を外して実に無駄に上手いウインクをかましてみせた。最期のは余計だがなんだこのサワやかな感じ……イタキラブチメガネのくせして、キラキラしてやがる……！

我が校には自転車置き場が無いため皆歩行通学を強要されているわけであったが、どうやらこいつ、一旦帰宅して俺たちのためにチャリを持ってきてくれたらしい。いやはや、俺の掃除時間がせいぜい十数分だったことを考えると、相当ガンバツたなこいつ。……何をたくらんでんのかは知らんがな。でもまあここはありがたく使わせていただく。

「助かるわ」

「気にすんなよ。それより……きつちりキメてこいよな」

恭介は瞳を花火のようにキラつかせ、親指を立ててみせた。

「決めるって、何をだよ」

すると恭介はニマ〜と目を細めて俺に歩み寄り、

「またまたトボけちゃってえ。図書館てのはカモフラージュだろ？」

こないだ駅前にできたあの店に行くんだろ？ 休憩か？ それとも……「ごご宿泊！？」 それならチャリは明日返してくれば、ゴボWあッ……！」

(しばらくお待ちください)

……よし、これでしばらく動けないだろ。

手を払って、麻弥を見ると……

……っってお前も顔赤らめてもじもじスカートの裾とかさわってんじやねえよっ！

第2話(4)

「……後ろ。乗れよ」

「あ、うん」

ほら見る、なんかビミョーな空気がうによ漂いはじめたじゃねえか。と俺は横たわった恭介に目配せしたが、返事がない。ただの屍のようだ。ともかく、チャリは借りてくぜ。

麻弥はどこか違う方向に視線を落としつつ、荷台に横向きにちよこんと座り、申し訳程度に俺のシャツの裾をつまんだ。

しかしそんな空気も、細くデコボコしたスリリングなあぜ道を自転車で駆けていると、なんだか子どもの頃に帰ったようなわくわくした気分になり、すっかり霧消していた。それは麻弥も同じだったように、弾んだ声で後ろから問いかけてきた。

「最後に二人乗りしたのっていつだったか覚えてる？」

「さあ、いつだっけかな。忘れた」

「6年生の夏だよ」

麻弥は懐かしむように柔らかくはにかみ（直接見たわけではないが

なんとなく分かる）、そしてあるうことが、肩と頭を俺の背中に乗せてきた。

「のわっ!？」

ただでさえ不安定な道だ。急に体重をかけられ俺はバランスを崩し（断固として主張するが、動揺したのではない）、麻弥を乗せたまま車体は右に左に蛇行する。俺はなんとかして持ち直そうとするが、両脇を畑に挟まれたあぜ道で、幅は2メートルもない。

……うん、無理でした！

「きゃあああっ!!!」

二人は畑に投げ出される。ああ……視界がゆっくり傾いてゆく……

どぶっ、とまあなんとも地味な音で土に落ちる。しかしよく耕された畑のおかげで、痛みは全くなかった。俺はむくつと上半身だけ起こす。するとすぐそばで倒れていた麻弥も起き上がってこちらを見る。二人は互いの土まみれになった全身を見る。そしてもう一度目が合うと、二人ともこらえきれなくなって、子どものように無邪気に笑った。

「あはは、なんかこの感じ、ずーっと忘れてたなあ」

俺は麻弥の汚れた制服を指差し、

「でもそれじゃ、図書館行けないな」

「あ……でも、楽しかったからいいや！」

「いいのかよ！」

また麻弥はきやははは、と笑う。もう、俺も笑うしかねえな。あはははは！

すると麻弥は涙をぬぐいながら、

「ねえなおくん、わたしね」

「ん？」

「わたし……」

「くおら！！ 人んちの畑で何やっとなるか！！」

麻弥の言葉を遮るように、後方で男性の声が空気を切り裂くように響いた。俺はチラッと後ろを振り返り、70過ぎくらいの爺ちゃん

がホースを手にこちらに向かってきてきているのを確認した。土まみれになったうえ水まで引っ掛けられてはたまったもんじゃない。

「まずい、逃げるぞ！」

とっさに俺は麻弥の手を引き、走り出した。走って、走って、もう追ってきてないことは分かっていたけど走り続けた。

楽しくてしょうがなかった。気付いたら、自分たちの家への分岐点まで来ていた。

「ぜえ、はあ、ここまでくりゃ大丈夫だろ」

「はあ、はあ、当たり前でしょ。どこにそんな長いホースがあるの」

「はあ……はあ、確かに」

俺は麻弥を見た。どんな顔してるのか、ちょっと気になったんだ。麻弥は俺の視線に気付き、一瞬目を合わせ、そして目線はつながれたままであった手に注がれ、じわわーっと頬を桜色に染めてゆく。

「あ、悪い」

俺はパパッと手をほどいた。麻弥はそのままぼやん、とした顔でほどこれた手から視線を俺に移し、小さく口を開く。

「さっきの続き……」

しかし俺は、

「ああ、それはまた明日にでも聞かしてくれ。早く風呂に入らんな」

といいかげんに流し、我が家に駆け込んだ。

……我に返った途端、急に照れくさくなったんだ。

おそらく、昨日の帰り道で言いかけたのと同じ内容だろう。それになんとなくだが、その話は聞きたくないような気もしたんだ。昨日も、今日も。

あ。畑にチャリ置いてきた。……ま、いいか。

第2話(5)

帰宅した俺は、玄関ポストから新聞を引っ張り出しドアを開けようとした。その時、新聞に挟まっていたのだろうか、何かがポストと地面に落ちた(狙ったわけではないぞ)。

……茶封筒……。

途端に俺の肩がピクンと縮こまるように震え、握った新聞が湿り気を帯び始める。昨日と同じやつだ……。俺はその場でGから始まるなんとやらと台所で対面してしまった奥様よろしくしばし茶色いそいつとにらみあったが、ようやくして決意した俺は腫れ物に触るように封筒を拾い上げ、何故か勢いよく玄関ドアを開いて、靴を最早ダッシュするのと変わらない造作で脱ぎ捨て、リビングに飛び込んだ。

「ゼーはー。ゼーはー」

「何してんの、兄ちゃん」

床にジグソーパズルを広げ四つん這いになった状態の妹が割と冷ややかに視線だけこちらによこす。俺はグツと息を飲み込み呼吸を整えつつ、手にした封筒を妹の前に置いた。

「昨日の謎の封筒が今日もポストに入っていたんだ……！」

「うーん、あんまり興味ない」

そう言っつて6年生はまたパズルを探り出した。お前はこの恐ろしさが分かっていないようだ。これは間違はなく関わっちゃいけない類のシロモノだ。クツ……しかし中身は気にならんこともない。……開けて、み、るか。

俺は封筒を手に取り、そして、糸を針に通すような手つきで封筒を開いた。中には……

「わあっ!!!!」

「イヤアああああ!!!!!!」

……え？

「兄ちゃんやっぱり怖いんだ」

妹が俺を見下ろすような形でニヤついていた。

お、おっと、今は嘘だ、ジョークだぜ。4つも年下の、しかも妹

を見上げるような体勢になるわけな、ないじゃないか。

第2話(6)

さ、さて、気を取り直して封筒の中身を確認しようではないか。知らぬ間に見当もつかない方向へワープしていた茶封筒を、たこ焼きをひっくり返すように拾い上げ、俺は念のため片目を瞑り方耳を指で塞ぎながら封筒を下に向けた。

はらり、と前回同様に一枚の紙が落ちる。俺は左右に舞うそれを空中で掴み(これくらいできるさ)、こみ上げるような決意と焦りに押されるまま、紙に書かれた文字を眼前に捉えた。

『時の齒車。記憶の欠片^{かけら}』

紙にはそう印字されていた。『運命の輪』に続きこれは……くさい。くさすぎる。アヤシイなんてもんじゃない。マズイって、これ。

「おい、戸締りは大丈夫か？ 二階の窓も！」

「えー、暑いから開けてるよお」

「クッ」

俺は妹ののんきな態度に怒りを覚えるより先に戦慄^{せんりつ}し、あらゆる窓

に急いだ。階段を駆け上がっていると足元から崩れ落ちるのではという恐怖すら感じる上、普段より階段が長いもののように錯覚する。途中手をつきながらも何とか上り終え、俺は自室に駆け込む。窓まで走り寄ろうとしたそのとき、俺は何かにつまづき、釘を打ち付けるような音と同時にそれより速く、鈍く冷たい衝撃が足先から全身へ伝わり、そして俺は派手につんのめって等身サイズの本棚にぶつかり、嫌な予感に浸る隙もなく本をバラバラと倒してしまった。

「つつ……なんでこんなとこに本棚が……」

とはいつたものの本棚をその位置にセッティングしたのは他でもない俺だったことに気付き行き場のない憤りに苛まれる。俺はそのまましばらく無残に崩れ落ちたマンガ類を見るでもなくただただ呆然とした後、痛む足先をさすりつつ身体を起こし一冊一冊手に取り棚に戻し始めた。それはそうと、下にいる妹の奴にもこの騒音は聞こえているはずだが、様子を見に来ない点、パズルに夢中か心配ひとつしていないということでしょう。兄は泣きそうです。

そうして本を片付けていると、あまり見覚えのない、水色のカバーがかけられた一冊を見つけた。埃を払いつつ開いてみると、それは俺の幼稚園の卒業アルバムだった。なぜか吸い込まれるように俺はアルバムをパラパラと眺めてみた。幼き姿であるとはいえ、ほとんどが見慣れた顔ぶれであった。ここ一帯にはあまり学校がないため、高校生となった今でも学校中に多くの顔なじみがいる。

「お、麻弥だ。……はっは、こいつ男みてえだな」

無理もない。麻弥は生まれた頃から父子家庭に育ち、また鶴崎宅周つるさき辺には年の近い女の子がおらず、昔から一緒に遊ぶのは近所の俺含む男ばかりだったからだ。それにこの頃の麻弥は幼稚園でもあまり女の子たちと過とごさず俺たちの戦隊ゴツコの輪にいたと記憶している。俺たちにも特に女子だからという意識はなく、むしろスラっと大きかった麻弥とは対等以上の関係であった。ここ最近はスラリとした肢体はそのまま、……なんだその、程よく起伏のある身体にはなってきたようだがな。

まあおそらく最後のページには園歌なり全員写真なりが載っているのだろうと思っただが、なんとなくめくってみると、予想外も予想外、先の封筒と同じように、はらりと一枚の紙と写真が落ちたのであった！

第2話(7)

いや、別に驚いてなどいないぞ。ただ同じ状況が続いた分、不吉さが助長されただけだ。

俺はできるだけ平静を保ちつつ、紙と写真をつまみ上げた。

紙に記されていたのは、殴り書きの幼い文字で、『終わりの始まり』。特に漢字の部分は懸命に辞書を引いてまねして書いたのだろうと容易に想像出来た。しかし、この紙に心当たりはない。俺は言葉の意味の考察もそこそこに、今度は写真の方に目を移す。

それは、近所の川辺の高架下を背景に撮られた、一人の幼い、見知らぬ少女の写真だった。少女は見る限り5〜6歳であると思われるが、はつきりした目鼻立ちに、腰まである黒髪が光彩を放っている、まごうことなき美少女であった。ちなみに言っておく。美少女とはいったが俺はロリじゃない。だが10年たった今の姿を見たいという気になったのは確かだ。

俺は静かに紙と写真を床に置き、思考をめぐらす。……………この少女(よ、幼女か…………?)に見覚えはない。そこで俺は急ぎ卒業アルバムをめくり直し、園児の顔写真一覧を凝視する。もしやこの中にいるのではないか……………

……い、いない……だと………？

俺は即死魔法を多用するモンスターと眼が合ってしまった勇者のよう
にまたも戦慄し、なぜか酸欠状態に陥り視界がモノクロになりう
ごめきだす感覚に襲われた。

俺は、追われている……！？

第2話(8)

視界が狭まり、意識ともにブラックアウトするかというときにもか
かわらずふと脳裏によぎったのは、戦隊ゴッコでの俺の配役は毎度
ピンクであったということだった。

「そこは麻弥だろ……」

そう言い残し、俺は急速に傾く本棚が見えた後、どこか遠いような、
えてしてもものすごく近いような所で床を硬いもので打ち鳴らす音を
聞いたのを最後に、安らかに眠りについた……

アハハハハ……アハハハ、はははっ……

……俺が何をしているかって？ ふふっキミはナンセンスな質問を
するんだなあ。わかるだろう？ お花畑を走っているのさ。この花
畑を越えて、俺は安らぎの国へ行……

すると麻弥は写真の少女に顔を向けたまま、かすれそうな小さな声で呟いた。

「葵……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8284t/>

夏好き少女と暑がりの俺

2011年12月7日18時53分発行